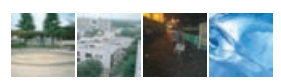


UTOPI@ UNIVERSITY



現代の子どもたちを取りまく環境は危機的状況にある。公園は治安においても衛生においても安全ではなく、ガキ大将に襲われるような子どもだけのコミュニティは寸断されている。

大学も短期的探求の場としての存在意義が問われている。学齢人口の減少は、理由のひとつにすぎない。講義には空席が目立ち、就職活動を行わない者すらいる。ラストモラトリアムにおいてリアルにとらえられるべき社会は、学生にとっては空想の世界に等しい。

そして我々が過す日本の四季は崩壊しようとしている。夏季の最高気温は年々上昇し、亜熱帯気候に唇を垂れようとしている。スクールと併存にふさわしいほどの集中豪雨により、都市機能は完全に麻痺した。

これらの諸問題は現代が進もうとしているベクトルの成分である。ゆえに個々に解決されるべきではない。

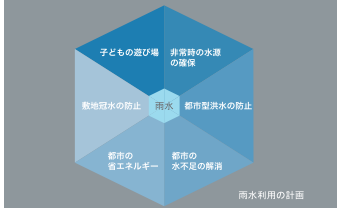
学齢人口の減少によって大学に生まれた不要なスペースは、各校区の1部をロイヤリティに置きかえられる。大学は浮遊する。セキュリティは確保され、四圍の垣は消失する。キャンパスの広大な敷地はひとつながりになり、周辺地域と融合する。

ゆるやかに隆起するデッキが敷地全体に広がり、その下には遊水池が設けられる。デッキは濾過装置であり、降雨と蒸発による水面の上下によって、自動的、半永久的に浄化される。

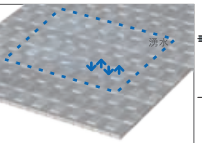
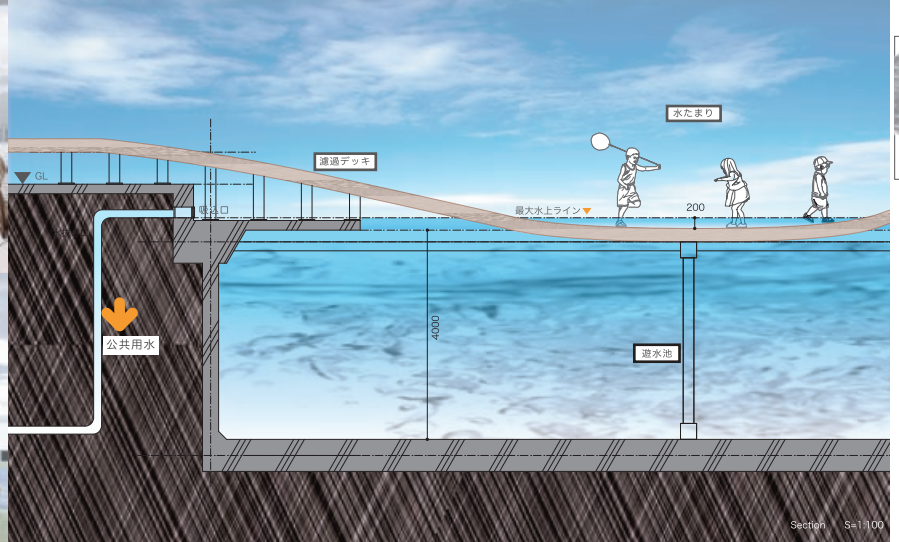
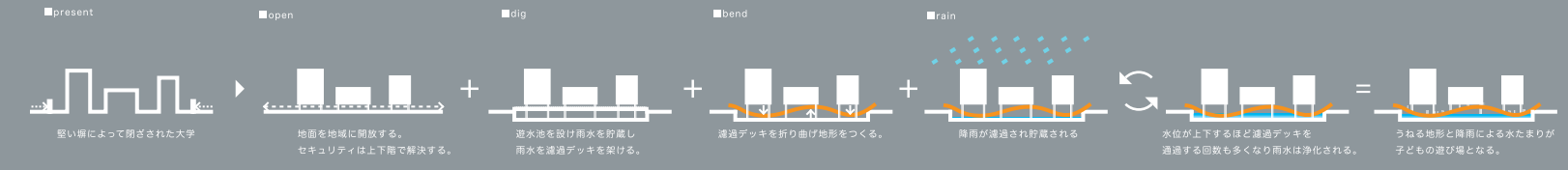
降雨によってデッキ上には水たまりが作られる。それは池となり、あるいは消滅する。自然の営みが顕在化する。

子どもたちは存分に自然と戯れ、大学構内であることに親は安堵する。学生は、守るべき次世代の規模により、自戒し、奮起する。近隣から訪れる老人は、子どもたちの保護者であり、学生の師である。

ここは都市のユートピアである。



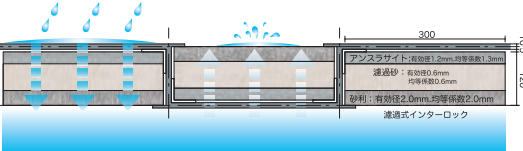
雨水利用の計画



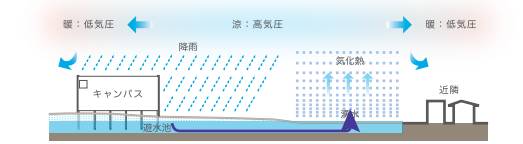
↑ 遊水池→遊水デッキ→湧水
↓ 降雨→遊水デッキ→遊水池
手島レイアウト図

従来の遊水池ではそのキャパシティを超える水量に達したとき河川などに放出したり、公共用水として利用されてきた。

この遊水池では、キャパシティを超える水量が地表面に現れる。出現した水たまりは、最大深度200mmに保たれ子供のような小さな身体においても安全である。遊水デッキを透過して湧き上がるきれいな水たまりは子供にとって安全であり、親にとっても安心できる遊び場となる。



舗装材として使用されるインターロックに濾過機能を持たせて平島状に配置させる。降雨は上から下へと濾過され（一段階目）、貯水される。キャパシティを超えた水は下から上へと濾過され（二段階目）、水たまりをつくる。降雨と蒸発による水面の上下によって、自動的、半永久的に浄化される。



環境ダイアグラム
キャンパスから出現する水たまりが気化することにより、地表面の熱を奪う。上空へと上がった涼しい空気は、キャンパスの温度を下げ、そこから発生する気流は周辺環境へ心地よい風をもたらす。